

『天路歷程』邦訳史(二)

高 村 新 一

(一)

前回は村上俊吉訳・佐藤喜峰篇の最初の邦訳『天路歷程』について書いたが、引き続き二番目のいわゆるホワイト訳『天路歷程』について述べることにする。

最初におことわりして置かねばならないのは、筆者が前号の邦訳史を発表したのとほとんど時を同じうして、畏友斉藤光氏が、雑誌『文学』(岩波書店、一九七九年三月号)に「キリスト教文学の移入——『天路歷程』の場合——」という論考を発表され、当然ホワイト訳についても、かなり詳しく述べられていることである。これはたいへん優れた論考で、筆者も多くの事を教えられた。だが、本稿が『天路歷程』の邦訳

『天路歷程』邦訳史(二)

史である以上、筆者もまたホワイト訳を扱わざるを得ず、斉藤氏の論述と、どうしてもある程度重なってしまう。その点、斉藤氏の御了承を得ているが、以下を読んでくださる方々にも御諒解をお願いしたい。

さて、前回には真の訳者は誰か、の問題があったが、今回もまたそれが問題になる。明治十九年に初版の出た本書のとびらには「英国人ホワイト氏訳」とあり、上部には「Translated by Rev. W. J. White」となっている。反証がなければホワイト訳ということになる。だが、後述するように、本訳には日本人が書いたとは思えないような表現が至る所にあつて、宣教師の筆になったとは、どうしても考え難いのである。では本當の訳者は誰か。

邦訳で三番目の『天路歷程』を訳した池亨吉(いけ・こうき) (正篇

は明治三七年刊)はそのはしがきで次のように言っている——「⁽²⁾之れを翻訳するは、事頗^{こと}ぶる至難^{ぞうなん}に属^{ぞく}す。然りと雖ども我が国既に其の二つを得たり。一は中村敬宇先生を後楯として佐藤喜峯氏の手に完うせられ、一は日本人某氏を助手としてホワイト氏の労に成れり。」

この「日本人某氏」は池には誰かが判っていたのに、はつきり言うのを憚ったものと思われる。斉藤潔によれば

「……ホワイト訳の天路歷程、これはホワイト訳となっているが実は松村介石氏が訳したものである。ホワイトといふ人は英国派バプテストの人でわが基督教文学に貢献した基督教書類会社の創始者の一人である。性豪放な畸人とも称すべき人であった」⁽¹⁾と云う。小沢三郎氏も、渡辺元氏のこととして、次のように伝えている。

「松村介石氏は嘗て筆者等の母校、築地の東京学院の近くに住んで居られ、しばしばわれらの学校に來られ、ホワイトと言ふわれらの宣教師とも親交があり、天路歷程のホワイト訳は、実は松村氏の手になったもの⁽²⁾だとの事を聞いた」

この渡辺元氏のことには具体性があり、真実に近いと思われる。益本重雄氏も「この天路歷程はホワイト氏訳とあるが……松村介石氏が陰に隠れて為されたものだといふ話。同氏は当時、ホワイト氏を助けて、又その出版所にをられたし、その労を取られたのだからそれが本当であら

う」⁽³⁾と述べておられる。

筆者が戦災で失ったホワイト訳初版の、たしか表紙裏のあたりには、達筆で墨痕淋漓として訳者と書かれてあった。誰かに贈ったものに相違なく、訳者は日本人であったことは間違いない。(松村はバラの英学塾に学んで、のち牧師となり、内村鑑三、植村正久とならんで三村と呼ばれるほどであったが、のち儒教に傾斜し、正統な基督教から外れて行った人物である。)

本訳は、初版(明治一九年)は三三二頁、再版(明治二二年)三三七頁三版(明治二六年)三四二頁といずれも版を組み変えている。初版は倫敦聖教書類会社(横浜製紙分社印刷)、以後は基督教書類会社刊。再版以降は、ホワイトの要請によるアメリカ公使 Richard Hubbard の英日両国語の祝辞的な書簡が巻頭に加えられ、さらに三版からは「天路歷程序」として高橋五郎の寄せた紹介文が四頁つけ加わった。そのうちに曰く「彼が文章は則ち東坡の所謂绚烂極而平淡なる者、字々句句金石ならざるは無し(縦し稀には鉅璞をまじふとも)、之を翻訳すること固より容易ならず……」と。

「佐藤訳」⁽⁴⁾にもあてはまることだが、この訳でも、原著にある、出版に至る事情を説明した長い序歌と二十四行より成る結びの詩、また、文中にしばしば挿入される詩、たとえば、重荷が背から落ちたことを喜ぶ

クリスチャンの歌などが一切が省かれている。さらに、「すると私は夢の中で……を見た」という無数に出てくる表現をほとんど飛ばしてしまつた。また原文にはない章分けをして、全体を十九章にまとめてあるが、これは読者が読み易いように、という配慮によるものであろう。

(二)

さて、本訳の実態はどうであつたか。筆者自身による検討を報告する前に、斉藤氏もされたように、先ず、植村正久と坪内逍遙とによる当時における本訳の批評を紹介しておきたい。

植村正久は本訳が出版された明治十九年の『六合雑誌』五月号に、さつそく「ホワイツ氏の天路歷程」という一文を寄せ、先ず「佐藤訳」の後に出来るからには、さぞや改良されたものになっているだろう、との期待を裏切られたことを述べたのち、

「小説とはいへ宗教の道理に関する事を只管に弓張月などに模倣して著述するは如何あらん余輩は他の書は兎も角バンヤンの歷程ほどの書は真似目の文章を以て訳する事を優れたりと思ふべきを得ず若し馬琴の文体に倣はんとならば模倣を巧みにせば或ひは恕する所もあらんされど一銭新聞に往々見ゆる馬琴の模倣に至りては虎を書きて犬に類するものなりと云はざるべからず」^(c)

と述べ、倫敦聖教書類会社ほどの由緒ある大会社が「如何なれば斯くも

『天路歷程』邦訳史(二)

浅間しき書を立派に印行せられしか」と難詰している。植村はさらに本訳を飾る挿画について批評を加えているが、これについては、都合上、あとで触れることにしたい。

次に逍遙の反応はどうであつたか。

「吾人思へらくバンヤンの作の他の千万の作に優る所以は其信心全篇に溢れ一字一句虚飾浮華ならぬ所にあり平淡の中に無量の誠の籠れるにありと……然るに今『天路歷程』を見るに行文をさく馬琴を学^{まごころ}びて所々浮靡に近く俗間に行はれたる凡小説を読む心地す、原文の簡なるを引延したるは彼と我と文格異なれば止むを得ずとするも虚飾を加へて原意の質撲を損ねたるは口惜し」⁽⁶⁾

このように、逍遙の評は植村のそれと軌を一にしている。逍遙は二三の具体例をあげて評したのち、疑念城および死の河のくだりの一節づつの訳を抜き出し、「及ぶべき丈直訳にすれば左の如し」としてみずから訳を試みている。これはたいへん珍らしいので、少し長くなるが、敢えて二つとも紹介しておきたい。訳の検討には原文もあつた方が便利なので併記する。

Now there was not far from the place where they lay, a Castle, called *Doubling-Castle*, the owner whereof was *Giant Despair*, and it was in his grounds they now were sleeping; wherefor he getting

up in the morning early, and walking up and down in his fields, caught *Christian* and *Hopeful* asleep in his grounds. Then with a *grim* and *surly* voice he bid them awake, and asked them whence they were? and what they did in his grounds? They told him, they were Pilgrims, and that they had lost their way. Then said the *Giant*, You have this night trespassed on me, by trampling in, and lying on my grounds, and therefore you must go along with me. So they were forced to go, because he was stronger than they. They also had but little to say, for they knew themselves in a fault. (7)

(ホワイト訳)

去る程に此所を去る遠からざる地に 疑念城と云へる城廓あり 此の城主は 絶望齋とて 容貌魁偉の剛の者なるが 今朝しも早起して 郊外を遊歩なすに 大地に二人の眠れるを見る 是別人ならず 従道望道なり 絶望見るより 声荒く呼覚し 汝等何者なれば 何処より来りて我が領内に潜み入る と云ふも怖しき荒男子の 如何なる業をも為し兼ねは素振にそれと知られたり 二人は大いに驚きて 起き直り 吾々は道に迷ひし旅の者 恠しき業を為すものならず と只管詫るを耳にも懸けず 黙れ奴輩 汝等夜中斷りもなく 我が領内に潜み入り 我が地を踏み 我が地に横はるぞ奇怪なるいざ追立てゝ連返らんといふにぞ二人

は之に敵しがたく身の過に出でしとなれば言葉なく追立てられて云々 (8)

(逍遙試訳)

爰に渠等が臥したりし処より遠からぬあたりに疑念城といへる城ありけり其主は巨人自棄といふ渠等が今眠りたりしは件の巨人の領地なりきされば彼の男朝早く起いで、田畑をあちこち逍遙させるうちにフト領内に熟睡せし信者と望多とを見出しぬ聴て怖ろしき声にて起きよと呼び何処より来て爰に何せるぞと問ふ二人は回國者なりと告げ道に迷ひきと語りぬ其時巨人いふ汝等今夜我地面を蹂躪り我地面に横臥りて我權利を侵害せり此の故に我と共に来らざるべからずと、二人は随ひ往かざるを得ざりきそは彼の彼等よりも力強ければなり彼等はまた殆ど言ひいでん言葉なかりき己が過を知ればなりけり (9)

原文と較べれば明かなように、ホワイト訳のうち「容貌魁偉の剛の者なるが」「云ふも怖しき荒男子の如何なる業をも為し兼ねは素振にそれと知られたり」「恠しき業を為すものならずと只管詫るを耳にしも懸けず黙れ奴輩」などは勝手な附加であり、中でも逍遙に気に入らなかったのは、最後の「言葉なく」という箇所であろう。

なお逍遙訳については、「右は斯くの如く訳せよと記したるにはあら

ず原文の質樸平担なるを見せんとて也⁽¹⁰⁾」と言っていることに注意する必要がある。

逍遙が訳したもう一箇所は以下のようである。

(原文)

They then addressed themselves to the Water; and entering, *Christian* began to sink, and crying out to his good friend *Hopeful*; he said, I sink in deep Waters, the Billows go over my head, all his Waves go over me, *Selah*.

Then said the other, Be of good cheer, my Brother, I feel the bottom, and it is good. Then said *Christian*, Ah my friend, the sorrows of death have compassed me about, I shall not see the Land that flows with Milk and Honey. (p. 266)

(ホワイト訳)

従道望道も爰に及んで詮すべくなく死ぬるも生るも命なりと覚悟を極め身を躍らせて汨と水中へ飛込たりたり斯くて従道は次第く深淵へ沈み覚束なくぞ見えけるが大に叫びてあなや、主の大浪吾を巻く早や溺れんといへば望道は心安かれ従道ぬし吾いま水底に足の触れたりと氣を励せど従道は否とよ死の苦み今吾身に迫れり吾また乳と蜜の流るゝ陸地(天

国)を見ることがなけん云々(初版三二〇―三二二頁)

(逍遙訳)

さて彼等は身づくろひして水の中に入る程に信者は次第に沈みぬ聴て其良友望多をよばひつゝいふ我は深淵へ沈む大浪我頸上を超ゆ波みな我をおほふ *Selah* やと其時他はいふ安せよ我兄、我河底に触る、気づかひなしと、其時信者はいふ嗚呼我友よ死の悲み我身に逼りぬ我は乳と蜜との流るゝ国を見ざるべしと(前掲書六二―三頁)

この場合もホワイト訳は饒舌に過ぎ、「死ぬるも生るも命なりと覚悟を極め身を躍らせて汨と水中に飛込」ったのでは勢いがよすぎ、状況に合わなくなっている。

(三)

ここで上述のような表現の訳文のうち著しいものを検討してみよう。本訳は現在ではわずかの部数しか残っておらず、なかなか眼に触れがたいと思われるので、やや詳しく具体的な訳し振りをもう少し紹介しておきたい。必要な時は原文も併記することにする。

- 「斯るべしとは白糸の、結ばれ解けぬ妻や子は」(初版六頁)は原

文では his Wife and Children とのみある所。逍遙は前記の文章の中で、これにつき「陳りたる淨瑠璃の文句也そればかりならばよけれど調のいと浮きたる嫌ふべし況して結ばれ解けぬとのみにては憂に沈めるの意通ぜざるをや」と評している。

●「……様々に云ひ詰られ、柳太郎は、返す言葉も泣顔を、蜂に刺さるゝ心地して」(一九頁)ここも原文は *So Pliable sat sneaking among them.* (p. 152) とあるのみ。逍遙も「是バンヤンの用ふべき文句歟」と文句をつけている。

●「解くに由なき罪障の、重荷はいとど身に積る、憂苦は更にます鏡、顧る暇もあらで今ははや……」(二二頁)

●「今は早や、頼み渚の棄小舟望み絶えにし身と零落て、鉄の囹圄に繋かれたり」(六一頁)

I am now a Man of Despair, and am shut up in it, as in this Iron Cage (p. 166).

●「一度歩めば事足る路を、三度重ぬるのみならず、日も早や西へ入合の鐘の響きにいと猶ほ、淋しき路を辿る敢なき」(八三頁)

I am made to tread those steps thrice over, which I needed not

to have trod but once; Yea now also I am like to be benighted, for the day is almost spent. (p. 175)

●「何の用捨も鉞の、桎梏堅く押しはめられ、檻の中なる憂目こそ、見ゆるもいふせき様なりけれ」(一八六頁)

●「憐むべし従道は、不慮の難儀に陥りて、昨日は東、今日は西、風に柳の柳太郎には口汚くも罵られ……」(二六頁)

●「おん身の浅慮なる、啻に異国人の説くに任せて、千金の身を飛んで火に入る夏虫の、愚に倣ふこそ慙なれ」(二三頁)

And why should a man so carelessly cast away himself, by giving heed to a stranger? (p. 153)

●「仮令道にて、千辛万苦に遭ふとも俛よ、重荷の責苦は、忍ぶに余る袖の雨、濡るゝ覚悟の旅なれば」(二三頁)

Me thinks I care not what I meet with in the way, so be I can also meet with deliverance from my burden. (p. 153)

(この所、so be I can 以下は「重荷をおろしてももらえさえすれば」の意だから、意味を取り違えているようだが、ここでは馬琴調の一例とし

てのみ挙げておく。

長々と馬琴調で勝手に挿入してあるものさえある。

●「(ちて、うきとつらきの浮世ごと、兼て覚悟の上ながら、斯く憂き事の身に積みて、嘆きの淵に沈むとは、是も由なき繰言と、独語つゝ) 従道は元来し道へ遽ぐ旅……」(三八頁)

●「(水の流れと人の身は、変るが常の飛鳥川、測瀬定めぬ旅衣、今日教明が許にきて、七情の教示を目前に視て、畏るころのそのうちにも、行末望みあり暁の、いと頼母しき一筋みち) 今しも歩み行く従道は、救済の壁とて、両側に、いと堅固なる牆壁ある道に出たり」(六九頁) 上記二例は、それぞれ第四章と第七章の書き出しの箇所、カッコは筆者がつけたもの(以下同前) カッコ内が全く原文にない附け足しである。

●「(実に口賢しき人の、でかし顔に他の難儀を思はぬ程、片腹痛きこととはなし、又自ら守ることの、甲斐なくて、他の浮説に誤らるる程、口惜き者は世に非じ、) 爰に従道は、(助の言を契に、) 今まで守りし道を転じ、守法の許に到り、救助を請はゞやと、その宿所をさして進みしが」(二六頁)

So Christian turned out of his way to go to Mr. Legality's house for help. (p.155)

●「(然る程に、日は既に西山に影を留めず、月はまだ東山に光を放たず、四面暗黒にして、風声軋た高し、落葉背を打て、小心將に消えんとす。) 斯れば従道、道すから復も昼眠の罪の仇なりし事共心に浮みしかば……」(八四頁)

Yet before he got up, the Sun went down upon Christian, and this made him again recall the vanity of his sleeping to his remembrance.... (p.175)
the Sun went down upon Christian の所が水増しされている。

●「門内に納れらるゝ事も許さるゝ、その大恩辱けなしとも、有難しとも、申やうなまわが仕合、(と嬉し涙に声濁らせば……)」(四四頁)
But Oh, what a favour is this to me, that yet I am admitted entrance here. (p.161)

●「懇切なる貴家の恵に、今斯くも、既往のことを語る嬉しき、(御推量あれ方々と、嬉しき面に顯れたり)」(九五頁)
I thank you for receiving of me. (p.179)

●「……今立所^{たちどころ}にうち仆^{たは}さん(と最と声高に叫びける、従道さてはと思ひしが、弱みを見せじと声張り上げ)」「実に我身滅亡府に生れたれば……」(一一〇頁)

(*Apollyon*): . . . I would strike thee now at one blow to the ground.
(*Christian*): I was born indeed in your dominion . . . (p. 185)

●「二人は茲に心も落付^{おちつき}、道すがら、有りし絆共互^{ことども}に、胸襟を開きて打語らふ、(其の樂々^{たのし}、二人に取りては、万宝にも換へ難かるべし)」(一二〇頁)

●「おん身の如き、小量にして、憂を好むものは、共に語るに足らず、(と云ひ棄てゝ、大地を蹴立て去りにけり)」(一二〇頁)

I cannot but conclude you are some peevish, or melancholy man
not fit to be discoursed with, and so adieu. (p. 207)

●「二人は、その夜半の頃より、一念を凝^{かち}じて祈禱^{いのり}を初め、(音声滔々として夜静を破りたり)」(一二三八頁)

Well, on Saturday about midnight they began to pray, and continued in Prayer . . . (p. 234)

ここまで、主としてテキストにないものを自由に挿入した例を拾って来たが、以下に、訳全体が自由に過ぎると思われるものを挙げる。検討の便宜上、原文の方を先に示しておく。

● and looking very narrowly before him as he went, he espied two
Lions in the way. (p. 175)

「少しく進みて前面^{むづか}の方を望めば怪き^{あやし}ものゝ動くありけり、是は何よと、尚も近寄り熟視すれば、是なん二疋の猛き獅子にて、殊に道幅の狭みたる所に躊躇^{ちゅうちう}し、此方^{こなた}を睥睨^{へいげい}して起も上らん勢^{いきおい}なり」(八五―六頁)

● and behold at a great distance he saw most pleasant Mountainous Country, beautified with Woods, Vinyards, Fruits of all sorts; Flowers also, with Springs and Fountains, very dilectable to behold. (p. 183)

「四山或は高く、或は低く、新緑旭日に映じて滴るが如し、遙かに南方を望めば、一面山多き所、新樹林^{しんじゆりん}を為して、遠く連り^{つらなり}、その端には葡萄園あり、各種の果物あり、百花千草青紅織るが如く、細流縦横白布を引くが如し」(二〇六頁)

● So when *Christian* was stepping in, the other gave him a pull: Then said *Christian* what means that? (p. 159)

「是は難有と身を進むる、従道の肩先引握み、矢庭に内へ挽入れたり、従道は且つ驚き、且つ訝り、是は又怪しかる所為かな、抑も何故に斯くは疎略の取扱を、と問へば……」(三九—四〇頁)

● I looked then after *Christian*, to see him go up the Hill, where I perceived he fell from running to going, and from going to clambering upon his hands and his knees, because of the steepness of the place. (p. 173)

「却説も従道は、行く道の険しさに、樹の根岩角嫌ひなく、手を伸べ膝を張り、攀ぢ登りつゝ、稍く山の半腹に到りぬるに……」(七八頁)
この going は「歩行」の意味で、走っていたのが、上り坂が急なので、歩行に変わり、さらには腹這いにならざるを得なかった、という、道の険しさのゆえに進む速度が目に見えて落ちて行くことを言わなくてはならない。本訳ではそれが出ていない。

次に、明らかな誤訳をいくつか挙げてみよう。

● Come, what cheer? how is it now? (p. 204)

「四方の眺望の美き、貴兄は如何におはすや」(一六〇頁)

What cheer? は「御気嫌いかが?」の意なのに、cheer を cheerful の関連で考えたらしい。

● For thought he, had I no more in my eye than the saving of my life, it would be the best way to stand. (p. 185)

「我命を全うせんことを図るより、他に歩は転げまじと……」(一〇九頁)

had I ぢ if I had だかゝ、こゝは「もしも自分の命を救うことしか眼中になつてゐても」の意になるが、こゝがまちがひ。

● Let's dispatch him out of the way. (p. 217)

「速かに渠を殺し其の道を滅すべし」(一九六頁)
この out of the way は邪悪なものを除く意味で使われる表現だから、「道を滅す」はおかしい。

● he made them a very low Conge (p. 220)

「ごとも卑しき挨拶すれば」(二〇四頁)
a low Conge は深々と頭を下げることで、卑しいのではない。

● Then was his fellow silent, as mistrusting that he had led him out of the way. (p. 230)

「従道は、固より誤ちたる、つもりなければ、只黙然として立居たるに」(二三八頁)

mistrust はここでは「疑念が湧く」ことで、「誤った道へ友を誘導してしまったのではなからうか、という疑念が湧いて来たので」の意、それこそ「黙然として」いた理由が判るといえるものである。

ここで、筆者の目にとまった本訳の一つの特色に触れておきたい。それはきわめて、と言うより、むしろ余りにも日本的な表現の問題である。

上述のように本訳には、しばしば原文にない文句が挿入されているが、ここにもそれが顔を出す。「我が愛客よ、(袖ふり合ふも他生の縁、)

今宵おん身を宿し参らするも、浅からぬことぞかし」(九〇頁)。「寔に、身の愚なるを恥ぢて、悔い唧つの外はなく、(昔は物を思はざりけり、と古歌の志は今ぞ知る) キリストの美德高義は次第に心の裡に現れ出て……」(二九二頁)など筆者が附したカッコ内の表現はその例である。

「互に呉越の思ひをなして相疎んずること」(五六頁)「これ南柯の一夢なりけり」(三三二頁)などはまだいいとして、「呼子の鈴を引鳴せば、響に応れて障子おし開け立出する……」(八八頁)は……the Porter rang a Bell at the sound of which, came out at the door of the House, a... Damsel... (p. 176) の訳としては、どうだろうか。前号拙稿の「佐藤訳」でさえ、「斯て番人鐘を敲けば……莊美しき一童女鐘のこゑをきゝ門に出で……」(四四丁表)とある。「床間に一つの太

いなる画幅を掛け……」(四八頁) a picture of a very grave person hung up against the wall (p. 162) 「佐藤訳」は「向ふの壁に甚だ莊正なる人の図が掛けてあり……」(二三丁裏)も同然。「弓に矢番ひ従道が胸のあたりへヒョウと射る」(一一六頁) he threw a Flaming Dart at his breast (p. 187) 「佐藤訳」「火矢をもて基督徒の胸を射れば」(五八丁裏)はもう一例。後から出た訳としては、もう少し工夫がはしかつたという気がする。

ちょっと傍道に外れるが、有名な Vanity Fair の通りが、原文には the British Row, the French Row, the Italian Row, the Spanish Row, the German Row (p. 211) とあるのを「日本街、支那街、亜米利加街、英吉利斯街、仏蘭西街、独逸街」(一七九頁)とし、旧教についで Only our English Nation, with some others, have taken a dislike thereat (p. 211) を「但だ、日本街、英太利斯街、亜米利加街は其の流行を異にしたりき」(一八〇頁)としたのは、「佐藤訳」の場合と⁽¹¹⁾考え合わせて、時代を反映しているのがおもしろい。

竹友藻風は本訳について「この訳の背景には漢訳『天路歷程』がかなり重大な影響を及しているやうに思はれる⁽¹²⁾」と言ひ、その例として死の蔭の谷のくだりに出てくる表現「号々奔騰」(「喜峰訳」六二丁裏、「ホワイト訳」(一二三頁))があげられている。なるほどこれは偶然の一致

ではなさそうだが、果して全体として「重大な影響を及ぼして」いるだろうか。「号々奔騰」の前後を読み較べてみても、他に模倣ないし、焼き直しと思えるような箇所は見当たらない。

試みにこの観点から「佐藤訳」と本訳の訳し振りを二三較べてみよう。

● He ran thus till he came at a place somewhat ascending; and upon that place stood a cross, and a little below in the bottom, a Sepulchre. So I saw in my Dream, that just as *Christian* came up with the *Cross*, his burden loosed from off his Shoulders, and fell from off his back; and began to tumble; and so continued to do, till it came to the mouth of the Sepulchre, where it fell in, and I saw it no more. (p.169)

(「佐藤訳」)

基督徒は……奔りて一つの小高き所にいたりて見れば其処には上に一つの十字架を立て下には一つの空墓あり、扱て我は夢のうちにおゐて基督徒が彼処に近づくをみていたりしに彼が其処に至るやいなや彼の背上にある重荷は肩より脱けてころ／＼と転びて彼の空墓の中に跳入此後は復と彼の任を見かけざりし (三三—三四丁)

(「ホワイト訳」)

従道は……漸やく小高き所に到れり、風と見れば上に十字架の立てるあり、少しく下って一つの墓穴あり、頓て従道、この十字架の下に進む折しも背負ふ荷は、する／＼と肩を下り、身を離れて、落ると見えしが下り坂とて、ころ／＼と、墓穴の口へ転落ち、影だに留めず失せにけり (六九頁)

両者を読み較べてみても、後者が前者を真似ているとは思えない。後者には「下り坂とて」など無くもがなの句があり、例によって「我は夢の中に……するを見たり」を飛ばしたりしてはいるが、むしろ全体としては、よりこなれた読みやすい文章になっているように思う。

● But did you not with your vain life, damp all that you by words used by way of persuasion to bring them away with you? (p.180)

(「佐藤訳」)

「汝左ように彼らを勧むるとも或ひは行ふこといまだ善ならずして空言となりしにあらずや」 (五〇丁表)

(「ホワイト訳」)

「然はあれど、若やおん身の行ひの悪かりしより、如何程言を尽して渠等を伴はんと勧むるも、言行一致せざるものから、渠等は御身に従は

ざりしに非ざるや」(九九頁)

前者は言い足りず、後者はやや言い過ぎの嫌いがあるが、読み易さから見て、後者に軍配を上げたい。

その他、本訳で But of all the Men that I met with in my pilgrimage, he, I think, bears the wrong name. (p.197) を「是迄われ旅路に於て、邂逅^{やまひ}ひたる者の中、彼れ程に、名実相反する者はあらじ」(一四一頁)とし、pray, if you incline to answer me in this, say no more than you know the God above will say Amen to; and also, nothing but what your conscience can justify you in (p.207) を「おん身若し、これに答へんとならば、必ずや、仰ぎて天帝に偽らず、伏て良心に恥ざるの用意あれかし」(一六八頁)と訳すなど、多少の難はあっても、読み易い文章になっていることは確かである。

さきにも述べたように、竹友藻風が「ホワイト訳」はかなり漢訳に影響されている、とする想像は当たっていないと筆者には思われる。第一には模倣している箇所が発見しにくいことだが、もう一つ、間接的な理由ながら、本訳は明かに英語のテキストによっていると認められるということがある。今はその一例を挙げるにとどめたい。クリスチャンが Interpreter の家で見せてもらうさまな事柄の一つに、ごみだらけの部屋を掃除したら、ものすごいほこりが舞い上って、息がつまりそうに

なるくだりがある。本訳では当該箇所が「其のためおん身は殆ど咽^{むせ}びたり」(五一頁)となっている。この原文は thou wast almost choked therewith (p.163) で、「殆ど」は上記 almost を訳したもののだろう。ところが本訳の再版では「殆ど」が「痛く」に変えられている。choke は「窒息させる」の意味だから、「咽ぶ」では弱い。そこで「咽ぶ」の方を生かそうとすれば「痛く咽ぶ」ぐらいでちょうどよくなるわけである。この訂正を見ても、訳者は英語のテキストに基いて訳を検討したことは明かである。

次に、前稿でも扱ったように、このアレゴリーに出て来る人名・地名の訳名について見て行こう。

「佐藤訳」は漢訳からの重訳であつたから尽忠、美徒、利徒、疑棄など、なじみにくい名称が多く、わずかに世智助、疑^{うたがひ}の助、臆病左衛門などが日本式命名であつたが今度は全部日本式になった。Christian は従道^{じゆどう}、道連れの Faithful は忠道^{ちゆうだう}、Hopeful は望道^{もちみち}。はじめ従道をつれ戻しに追いかけた Obstinate と Pliable は、それぞれ剛情^{かうけい}の頑六と柳太(郎)、Worldly-Wiseman は浮世戈助。Talkative は弁蔵。By-Ends は私利蔵。Legality は守法^{しゆほう}、その子 Civility (有礼^{ありう}は森有礼を連想させる。)、その他、両舌師、絶望斎、救助^{きうすけ}、礼式郎^{れいし}、偽善斎、酷兵衛、嘘七^{うそしち}、難右衛門など。中には臆病^{おくびやう}など苦しいものもある。Palace Beautiful のお

とめたちのうち Discretion だけは聡子となっているが、あとの Prudence, Piety, Charity がそれぞれ賢次、敬三、愛之助と男性になっているのは妙である。鈍六、虚七など、数字のつくものも多いが、それぞれ全くちがった場面に登場する三人の人物 Presumption, Self-conceit, High-mind が、いずれも慢八であるのは困る。もっともこの連中は端役だから訳者も漫然と命名したのであろう。

場所の名称としては City of Destruction が滅亡府、Hill of Difficulty は難山、Morality 五常村、Valley of the Shadow of Death は死陰ヶ谷、Vanity Fair は虚楽の市、Valley of Humiliation は謙遜ヶ谷だが、この Humiliation は屈辱の意に取るべきであろう。

(四)

植村正久が本訳に加えた酷評は、一つは前述のように、その文体についてであったが、もう一つは訳に挿入された挿画についてであった。植村はこの点も重く見ているので、少し長くなるが、その所説を引用する。「……画中の基督教伝導者は円顚長袖にして如意めきたるを携へ恰も役の行者を見るに異らず時としては美はしき天女が竜宮の乙姫かと思はるゝもの紫雲に乗じて出現するなど余輩をして思はず噴飯に堪えざらしむ左れど又熟々考ふれば是れ時に笑ふべきに非ず余輩は西洋流の画に天使の翼ある様などを見て全く想像と思へど日本には輸入すべからざる画風

『天路歷程』邦訳史(二)

なりと常に思惟せり況んやホワイト氏の挿画に見ゆる伝導者天使悪魔天堂の画は一々嘲笑の念を伴へる仏教の妄誕を讀者の心中に喚起し基督教もまた他の迷信と一様なりとの感を与ふることあらん余輩は天路歷程の如き書を日本人に訳さんと欲せば画を加へざるを好しと若し加へんとならば善く其の種類を択ぶべし」⁽¹³⁾

この評のためか、本訳の再版以降は挿画がさし換えられた。初版では十二葉、再版では本文の前に、バンヤンが聖書を開いたまま、クリスチャンの旅を夢みている図が別に加わり、あとも二葉ふえて十四葉になっている。挿画なので、百聞は一見に如かず、以下に両版の挿画を並べて示すことにする。

描かれた場面も多少変更があるが、新しい挿画も植村をさして満足させなかったのではあるまいか。

以上で見て来たように、「ホワイト訳」は妙に調子に乗った馬琴調がところどころに顔を出し、それが強烈な印象を与えるため、全体を毒するほどになっていて、植村正久や坪内逍遙のきびしい批判を招いた。また補足ないし敷衍的な加筆が自由に行われていて、原文に忠実に、という気持は訳者になかったと見ていい。だが、それにもかかわらず、本稿一一―一二などの例や、drowned (p.150) を「海底の藻屑と化したる……」(一四頁)「佐藤訳」では「海に溺めらるゝ……」(七丁表)」とするなど、日本語として親しみやすく読み易い表現になっている所も

初 版 挿 画

画像
非公開

圖之ヲ示テ路行ニ道從道教

画像
非公開

圖之ル脱ヲ苦ノ荷重テ見ヲ架字十

画像
非公開

像真之助才世浮

画像
非公開

圖之ル沼ニ沼膳落ニ共郎太柳道從

画像
非公開

圖之ルク授ヲ賜天女三

画像
非公開

圖之ル到ニ門小道從

画像
非公開

景實之場市樂虛

画像
非公開

圖之ルス闘奮ト魔惡道從

画像
非公開

從道望絶之城牢獄ニメラルハ圖

画像
非公開

從道望道阱網ニ罹ル之圖

画像
非公開

天城眺望之圖

画像
非公開

死ヲ冒テシ川ヲ渡ル圖

画像
非公開

No. 10.

第十號

画像
非公開

画像
非公開

画像
非公開

John Bunyan

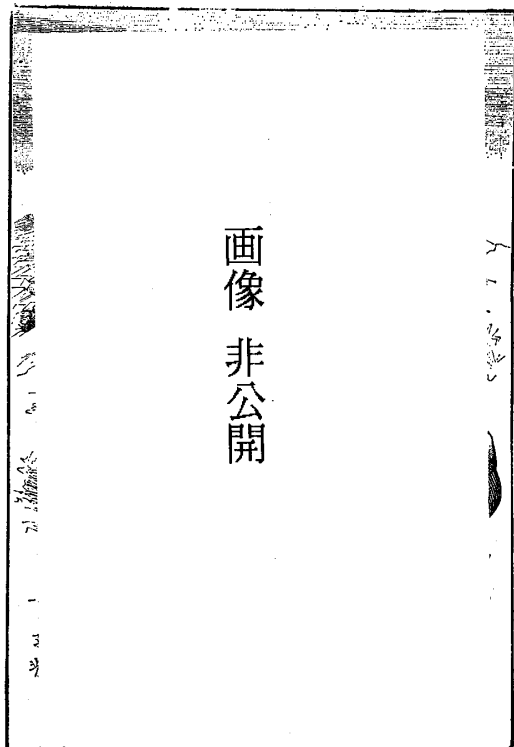
圖のす示を路行に道従道教

画像
非公開

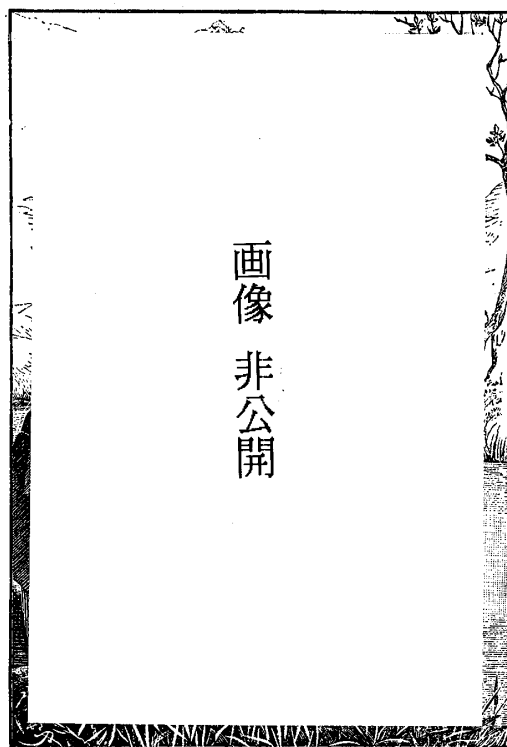
従道故郷を去るの図

画像
非公開

柳太従道に従て途に上るの図



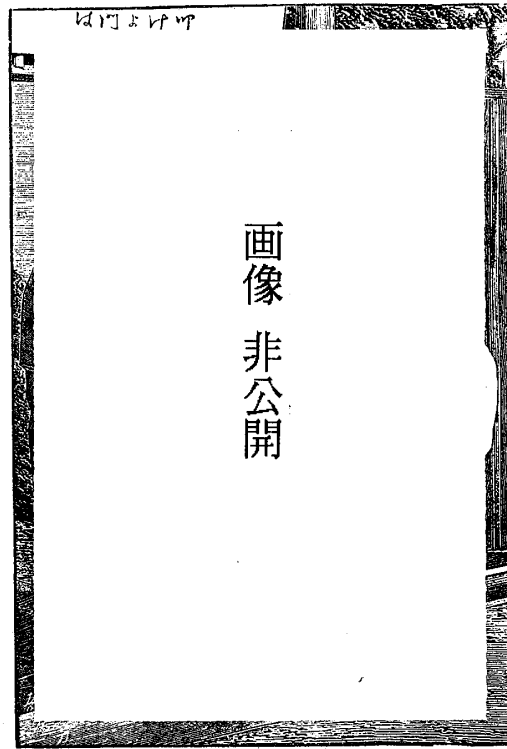
才助從道を感ずの圖



從道落膽の沼に苦むの圖



善意從道に道を教ふるの圖



從道小道に門に入るの圖

画像
非公開

従道重荷の苦を脱するの図

画像
非公開

従道難路を進むの図

画像
非公開

従道悪魔と奮闘するの図

画像
非公開

従道二人の戯楽市場を過ぐるの図

画像
非公開

從道望道の二人無神太に遭ふ圖

画像
非公開

從道望絶道望の城牢に囚はる圖

画像
非公開

從道及望道天川を渡る圖

少なくない。次の池亨吉の訳が出るまでに、本訳が六版を重ねたという⁽¹⁴⁾のも上記の諸欠点にもかかわらず、案外面白く読めたためだろう。加うるに挿画も多数あって、とっつき易かったと思われる。

挿画は植村の非難を受け、その非難は当たっていると思われるが、たまにこれらの画が、時代の移り変りを反映していて、興味ある資料を提供しているのは怪我の功名と言うべきか。

池亨吉の訳以降については稿を改めて述べてみたい。

注

- (1) 斎藤潔『明治基督教文学』羊門社(羊門文庫)昭和一三年、のうち「ヤコブの夢の梯子」一九五頁
- (2) 小沢三郎『幕末明治耶蘇教史研究』(日本基督教団出版局 昭和四八年)のうち「天路歷程の日本版について」(二一〇頁)の中で、渡辺元『基督教きのふ今日』文書堂、昭和一〇年、より引用。
- (3) 益本重雄『バンヤンと天路歷程——その文献考——』香柏社、昭和三年、七四頁
- (4) 明治一二年版の『天路歷程』は村上訳、明治一九年刊の本訳は松村訳とするのが本当かも知れないが、それぞれ、佐藤訳、ホワイト訳と認められていたし、殊に後者は終始ホワイト訳として出版されていたといういきさつがあるので、以下では便宜上、「佐藤訳」「ホワイト訳」とカッコをつけて使うことにした。
- (5) 佐波亘『植村正久と其の時代』第五卷、五八八—九頁
- (6) 坪内逍遙『小羊漫言』のうち「ホワイト訳『天路歷程』の評」有斐閣、明

治二六年、六〇頁

- (7) John Bunyan: *Grace Abounding & Pilgrim's Progress*, ed. by Roger Sharock, Oxford Univ. Press, 1966, p. 231. これは現在もっとも信頼できる版だが、筆者が便宜上、古い綴りなどは現在の慣用に合わせた。
- (8) ホワイト訳、初版二三〇—二頁
- (9) 逍遙、前掲書、六一—二頁
- (10) 同書 六二頁
- (11) 比較文化研究所紀要、第四〇巻、拙稿一五—六頁参照
- (12) 竹友藻風『天路歷程』(岩波文庫)第一部、訳者序九頁
- (13) 佐波亘、前掲書、五巻、五八九頁
- (14) 池亨吉『天路歷程』明治三七年、訳文自跋

〔本学文学部教授(英文学) 一九七六、七七年度 個人研究員〕